

# 関西大学FDフォーラム Vol.10



平成17年6月1日（水）第8回FDフォーラム



平成17年10月19日（水）第9回FDフォーラム

特集	第8回FDフォーラム .....	2
	FDレポート .....	4
	2005年度春学期・前期「学生による授業評価」アンケート報告 .....	6

## 編集・発行

関西大学 全学共通教育推進機構  
FD部門委員会・授業評価部門委員会

## 発行日

2005年12月1日

---

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35  
Tel 06-6368-1121 Fax 06-6368-0083  
<http://www.kansai-u.ac.jp/fd/index.html>

情報が氾濫して、個人の経験に堰き止められることなくたえずオーバーフローする時代になった。これと歩調をあわせるように、知識の断片化と軽視が確実に進みつつある。近年、教育においても知識の旗色はけっしてよくない。「大事なものは知識ではなく考えること」「知識の詰め込みは有害である」云々。知識は「考えること」に対立するものとして、あるいはもっぱら「詰め込み」の対象として捉えられがちだ。ほんらい知識と思考は不可分であり、ある程度知識の詰め込みがなければ学問や研究は一步も踏み出せないはずなのに、いつのまにか教育はものを知らないことにとっても寛大になった。

もともと「情報」には「教育によって人間を形づくる」informoという意味があったし、「知る」cognoscoと「考える」cogitoはもっと近い関係にあった。そしてそこには「経験」が介在していたはずだ。しかし、容易に情報が得られるようになった今日、知ることと経験は乖離し、知識はしだいにモノ化し「トリアビタ」化しつつある。

先日、テーマスタディ「読む人、書く人、作る人」（読売新聞社主管「活字文化推進会議」と共催）の公

開授業に、直木賞作家で古書店主の出久根達郎氏をお招きした。氏は授業のなかで、古本屋にとっては知識がすべて、知識がなければ古本屋は確実に損をする、とはっきり言われた。中学卒業と同時に集団就職で上京し、古書店で見習いを始めた氏にとって、知ることとはつねに生きることと隣り合わせだったにちがいない。知識を経験のなかにしっかりと繋ぎとめ、生きることのなかでそれを確認されてきたのだろう。いま、知識と思考と経験はちぐはぐな関係におかれているような気がしてならない。出久根氏の言葉に力があつたのは、知ること、考えること、生きることが一本に繋がっていたからである。

嬉しいことに、同じ日の夕刻、「学校インターンシップ事後報告会」で聞いた学生たちの言葉には出久根氏の話と共振する部分があつた。言葉の端々に、知識と経験を主体的に統合していくことへの覚醒と喜びが感じられたのだ。「学の実化」といういくぶん古めかしい学是が、もし若い学生たちの耳に切実な響きをもつのだとすれば、たぶんこういう地平にちがいない——報告会を聞きながらそんなことを思った。

## 第8回FDフォーラム報告

平成17年6月1日（水）14時40分から16時40分まで、千里山キャンパス第2学舎4号館F402において「大教室における効果的な講義のコツ」をテーマに開催した。

以下、当日の報告について寄稿していただいた。

### 大教室における効果的な講義のコツ

古宮 昇

大教室の講義を、学生にとって意味深い学びを生む授業にするために、私が大切だと考えているコツのいくつかを今日はお話させていただきます。

よい授業のコツについて、私がいちばん大切だと思う結論をまず申し上げることにします。

それは、「私自身がどうあるか」ということだと思います。

どういうことなのかを説明します。

私たちは誰でも、私たちに対して怒っていたり、馬鹿にしたり、私たちのことを嫌いな人にはところを閉ざします。それが健康なあり方です。

教員の中には、学生たちに対して「こいつらはやる気がない」「頭が悪い」「けしからん!」などと思いつつながら彼らに向かう人がいます。そういう教員に対し

て、学生たちはところを閉ざします。

彼らがところを閉ざすありかたはさまざまです。たとえば、出席しない。出席しても講義を聞かず私語をする。たとえ私語もせず黙って座っていても、ところは閉ざしていますから学ぶことはしない。そのように、ネガティブな思いを持っている人にはところを閉ざすのが、ところの健康を守るための正常なあり方です。

では反対に、私たちはどんな人にところを開くでしょう。私は、私たちのことを信頼している人に対してところを開くと思います。私たちのことが好きで、私たちを大切に思う人にところを開きます。私たちと一緒にいることを楽しく感じている人にところを開きます。

ですから学生たちが熱心に参加する授業を創るには、私が、学生たちから信頼され、ここを開いてもらえる教員であることが大切だと思います。

そのような教員であるために大切な意識のあり方は、楽しい、うきうき、わくわく、そして感謝だと思っています。

私は、いまの仕事ができることはとてもありがたいです。なぜなら安定した収入も社会的地位もいただけるからです。それだけではなく、私は良い社会を作る貢献をしたい、と思っていますから、こんなに多くの若い人たちに直接影響を与えることができる現在の役割をいただけていることがとてもありがたいです。

そして私が今の仕事をしていられるのは、学生たちのおかげです。学生たちがいてくれるからこそ、私の仕事があります。彼らの払う授業料が私の収入であり、彼らに教える機会があるからこそ、私が自分にとって意味の感じられる仕事ができるのです。

さらに、学生を信頼することが大切だと思います。彼らを信頼して、すなおにここを開くこと。そして「ぼくは学生に良い影響を与えることができる」と自分を信頼すること。

そういう気持ちで感謝と信頼に思いを馳せるとき、私は授業にあたってウキウキ、ワクワクします。笑顔になります。

私が、たくさんの仕事にかまけてウキウキワクワク、楽しい、ありがたい、という気持ちを忘れた学期には、学生の反応が良くありませんでした。私は学期中に何本もレポートを出してもらいますが、そんな学期では「私の授業によってこの学生はとてもポジティブな変化をしたなあ」と感じられるレポートも少なかったです。質の良いレポートもありましたが、それは主に、その学生が私の授業を受ける前から優秀だったのであり、私の授業によって素晴らしいレポートが書けるようになったわけではない、と私には思えることが多かったように思います。

「良い講義をするためにもっとも大切なことは私自身だ」、と私が申し上げたことの意味の一つはつまり、私が「学生を信頼し、尊重し、楽しく、感謝の気持ちで学生と向き合うことが決定的に大切だ」ということです。

ここで、学生を信頼する、ということには、学生を警戒するのではなく、彼らに向かって私がここを開いて自分自身を素直にさらけ出す、という意味が含まれています。

教員のなかに、一生懸命に講義はしているんですが、学生に向かって、意識と言いますかエネルギーといますか気といますか、それが閉じている人たちがいます。ちょうど、自分の周囲に目に見えないバリアを作って、そのカプセルのなかで一生懸命に話をしている感じです。

そのような教員の講義は、学生からすると「あの先生は一人で講義をしている」「学生に関心がない」「自己満足の講義だ」と感じる講義になります。

私にとって、ここを開くというのは身体感覚をとまなうあり方です。学生たちに向かってリラックスします。とくに胸とおなかを緩め、目の前の学生たちを信頼して彼らに向かって胸とおなかを開いて無防備になるイメージを体感します。そういう感覚で学生に向き合い、彼らと交流します。

最後に少し、テクニク的なこととお話します。

授業では最初がもっとも大切だと私は思います。つまり、一学期のうちもっとも大切なのは最初の授業です。そして毎回の授業のなかでもっとも大切なのは最初の5分間でしょう。最初を大切にしようとしてうまく進めると、その授業は半分以上成功したも同然でしょう。

たとえば、私語のない熱心な教室にするには、学期最初の授業で、そして各授業の最初の時間で、学生のここをつかむ工夫をし、そして私語をやめさせることが大切だと思います。

各授業の最初に、学生たちの注意をつかむ題材を用意します。ハッと思わせたり、ぎょっとしたり、「なんだろう?知りたい」と思うようなことを話すのです。

私語に対しては、「この授業では私語は禁止します」とまず最初に伝えて、それでも守らない学生には、かならず私語をやめさせてから授業を始めます。

最後に繰り返しますが、良い授業のためにもっとも大切なことは、私がどのような人間であるか、だと感じています。

(大阪経済大学人間科学部 助教授)





# FDレポート

以下は、FD部門委員会委員の推薦する教員より、「教育に関する特色ある取り組み」または「関西大学に赴任して」というテーマで、寄稿していただいたものである。

## 授業の一回性の重み

澤井 茂夫

ひょっとして以下の文章は本誌の趣旨と相反するものになるかもしれないが、私の中に「本質的なものは常に新である」という考えがあるので、それを基調として書いてみたい。

IT機器を用いた授業が盛んに開発されているが、私はそうした講義はしていないし、するつもりもない。ビデオ、DVDの類は用いることもあるが、あくまで副教材として利用するに留めている。

私の講義（授業）は極めて単純なものである。板書をし、学生に問いかけて考えさせ、回答が出たかなかったら、推論の方法や手順を話す。90分のうち70分間授業をしたら、B5判の紙を配って、授業についての〈所感〉でなく〈所見〉を書かせる。これの繰り返しである。〈所見〉は次週に必ず評価（文体の明晰性、論理性、授業の理解度などでAからEまでの5段階）して返却する。インターファカルティ教育科目「テーマスタディ」のような全学的科目ではしなかったが、学部内での担当科目では、毎週100枚前後の文章を読んで評価・コメントして返却した。

授業はその場に流れる一定のリズムと緊張感のうちになされるのがよい。そして学生を常に手を動かしている状態にさせることである。喋ってばかりいてもダメで、メリハリを板書することでつけさせる。五感全開に学生をもっていく。教える側は、ひとつの自己表現として、〈教えるというパフォーマンス〉をする。演劇的空間を自ら創出するわけである。

教師と学生が教室というひとつの空間で所定の時間を過ごす—その一回性こそが教える醍醐味であり、種々なIT器材などは用いず、声と文字と身振りの生身で学生に向かうのが得策と信じている。

教師の教える力量と意欲がなければ学生はついてこないし、学生の学力水準を十分に推し量りながら、時には知的好奇心を刺激する深みを持たせることも肝要である。

学生はノートをとって必死に聴き入る。それが〈所見〉にくっきりと表われる。

予備校で教えていたとき、たとえ有名講師の衛星授業でも教室はガラ空きだった。そこに生身の人間がないからである。大学においても、ヴァーチャルな授業は、一見先端的だが、事実上、実のあるものかは疑問である。

手塩にかける一人間を教育するのに手間と時間を省いてはならない。

（文学部教授）



## 教育に関する特色ある取り組み

李 春喜

「教育に関する特色ある取り組み」と聞くとすぐに「IT機器を利用した授業」をイメージしてしまう。しかし、私は授業ではほとんど「IT機器」を使わない。それは別に教育現場におけるIT化を否定しているわけではなくて、私個人の課題として、最も重要な教育環境は教員だと思っているからだ。

少し話しはそれるが、カセット・テープに始まって、CD・MD・インターネットからの配信と音楽を楽しむ手段は飛躍的に増えた。芝居や映画を鑑賞する方法も、ビデオ・DVD・インターネットとその選択肢は確実に増えている。にもかかわらず、人々はお金を払ってわざわざ生のコンサートに行き、生の芝居を鑑賞する。教育現場における授業も同じではないだろうか。IT機器を使って音声や視覚教材を提示することと同時に、一方で、教員が自分の生の声で授業をするという従来の授業の中身を充実させることも大切だと思っている。

私は語学の教師である。語学の授業の主たる目的は専門知識の伝達ではなく、学習している言語を受講生が少しでも上手に使えるようになることである。そのためには、学習者がその言語を使う機会が授業中にできるだけたくさんある方がよい。子供が母語を学習していく過程を考えてみるといいと思うが、子供をテレビやビデオの前に座らせておくだけではその子は言語を習得しない。周囲の大人が子供に話しかけ子供がそれに反応して答えるという作業を通して子供は言語を

習得していく。そういう意味では、語学の授業（もちろん語学の授業だけではない）は教員と学生、あるいは学生同士のインターアクションが特に大切である。

そこで、授業ではできるだけ学生に英語を使ってもらう機会を作る努力をすることになる。例えば、デジタル・カメラで撮った写真を英語で描写してもらったり、映画のシーンについて、たとえ内容が聞き取れなくても、見て分かることだけを英語で説明してもらったりといった活動を取り入れたりしている。当然教師も英語を話す。私は英語のネイティブスピーカーではない。しかし、ネイティブではない英語の教師が英語を使って授業をすることは、外国語を習得する難しさを学習者と共有できるという意味では語学の授業には大切な要素だと思う。

このように考えてみると、私は語学の教師として特に「特色ある取り組み」をしているわけではなく、語学の教師として当たり前のことを当たり前に行っているにすぎない。「教育に関する特色ある取り組み」といっても、結局は、「当たり前のことを当たり前にする」ということに尽きるのだと思う。

(外国語教育研究機構助教授)



## 関西大学に赴任して

田村 香月子

4月、初めて見る研究室の窓の外は薄紅色の桜が満開でした。その桜の花も散り、今は葉の色濃く、赴任してはや半年経つことを思い知らされます。それと同時に、よく半年間無事に授業を終えることができたものだと安堵の感も抱いています。

春期授業は基礎演習と選択科目の英語を担当いたしました。もちろんこれらは、他の専門科目等に比べ小規模なものです。しかし関西大学という初めての環境、初めての学生との初めての授業は、文字どおり私

にとって何もかも未知の経験です。ですから様々な点で悩み、考えました。場所に慣れる、テキストを選ぶという基本的な部分の苦労もありましたが、授業中一番困ったことは、学生の集中力、および授業への関心度をいかに高め、維持させるか、授業の進行が単調になるのをいかに防ぐかということでした。

具体的に、まず演習では、班別の調査と報告という形を多用しました。これは班内の学生同士の親睦を深める効果と、自ら調査発表するという緊張感を味わうことで知的好奇心を刺激する効果があるように見受けられました。しかし横断的な交流が難しかった点、また班内の役割分担を自主性に任せため、各個人が負担する課題量にばらつきが出てしまった点など、いくつか問題点が挙げられます。また自班の報告が終われば授業への関与度が下がってしまうため、いわゆる中だるみが見られたのも難しい点でした。

一方英語の授業では、個別学生をランダムに指名する方法をとりました。もちろん学生はいつあたるのか分かりませんから、相当努力して課題をこなしてきてくれます。実際に授業評価アンケートである学生が「課題は大変だったが自分の力になった」と嬉しい感想を述べてくれました。ですが、授業進行が単調になり起伏が少ないため、授業そのものに飽きてくるのも事実です。途中から担当を割り振り、学生がレジメを作成するという方法も考えたのですが、人数や学年の都合上断念してしまいました。

以上のように私の初めての授業は、結果として課題の多く残るものとなりました。授業アンケートでも、何人かの学生がいくつかの改善点を書いてくれました。今後はさらに大規模な授業も控えています。FD活動を通じて、これらの課題を1つでも改善できたら…。なにより、主役である学生との対話から学ぶ姿勢を持ち、学生にとって良い授業にするため試行錯誤を続けていきたいと考えています。

(商学部専任講師)



# 2005年度春学期・前期「学生による授業評価」アンケート報告

## 趣旨及び目的

より質の高い教育を行うためには、直接学生の声を聞き、授業に反映させることが必要であるとの認識に立って、その有効な手段である「学生による授業評価」を全学的に実施する。

## 実施期間

2005年6月13日（月）～2005年6月25日（土）

## 対象

- (1) デイタイムコース・フレックスコース及び第1部・第2部の平成17年度春学期・前期開講の演習科目をのぞく全科目を対象とする。ただし、原則、複数担任科目は除く。なお、通年科目については、担任者の申し出により、実施することができる。合併科目は担当学部でとりまとめて行う。
- (2) 専任教育職員及び非常勤講師を対象とする。

## 全体の講評

池内 裕美

### 1. 実施状況

表1:アンケート実施状況

		講義	外国語	体育実技	全体	
春学期・前期 開講科目	対 象	a.科目(クラス)数	1,630	1,507	189	3,326
		b.学生数	208,070	49,578	5,584	263,232
	実 施	c.科目(クラス)数	1,386	1,470	182	3,038
		d.回答者数	78,944	40,626	4,462	124,032
	実 施 率	c÷a	85.0%	97.5%	96.3%	91.3%
回 答 率	d÷b	37.9%	81.9%	79.9%	47.1%	
通 年 科 目	実 施	科目(クラス数)	2	0	0	2
		回答者数	21	0	0	21
実 施 合 計		科目(クラス数)	1,388	1,470	182	3,040
		回答者数	78,965	40,626	4,462	124,053

注「学生数」「回答者数」は延べ人数。

表1は、2005年度春学期・前期の授業評価アンケート実施状況を示したものである。実施率はアンケートを実施したクラスの割合を表し、回答率は学生の延べ人数によって算出した。実施率は全体で91.3%であり、ほとんどの科目でアンケートが行われているものの、回答率となると47.1%となり、これは調査該当学生の半数以下の協力しか得られていないことを示している。

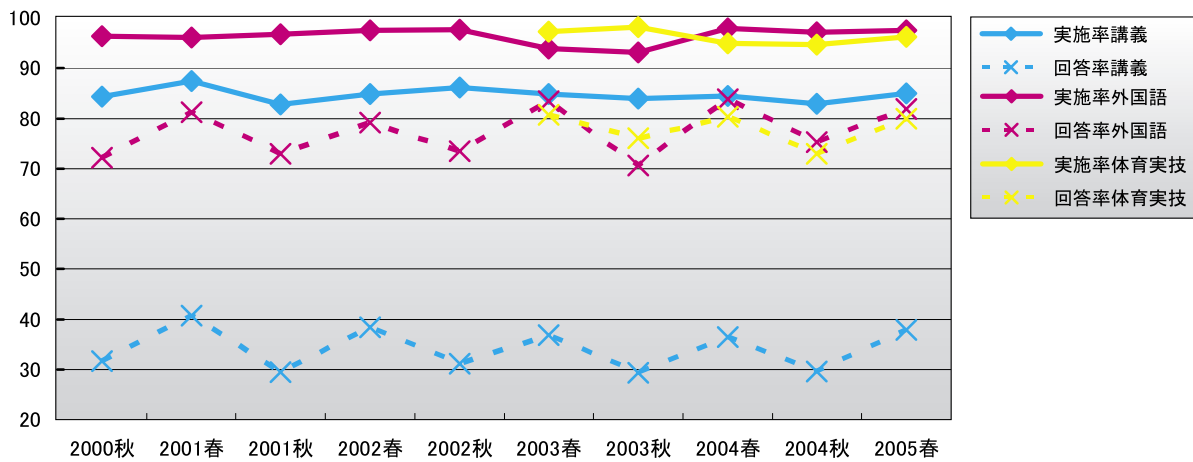
授業評価アンケート調査は今回で10回目となるが、体育実技に関しては第6回目から独自の質問紙による調査を実施している。図1に実施率と回答率の経年変化を示した。実施率は各回を通して概ね安定しているが、全ての回において講義科目が他の科目群に比べて幾分低くなっているのが特徴である。学部別実施率は、デイタイム・コース（第1部含、以下「デイ」）法88.0%（前回2004年秋学期実施比+4.1%）、デイ文93.8%（+2.3%）、デイ経95.6%（-0.3%）、デイ商94.3%（+2.9%）、デイ社95.2%（+1.0%）、工89.3%（+0.7%）、

総情83.4%（-1.1%）、フレックス・コース（第2部含）89.5%（+1.3%）、保健体育96.5%（+1.4%）、全体では計91.3%（+1.3%）であった。

また講義、外国語科目および体育実技を合わせた全体の回答率は47.1%であり（前回比+7.5%、表1参照）、これは昨年秋の調査結果（39.6%）に比べて7.5%の増加となっている。経年変化全体を通していても秋学期の回答率がかなり低く、これは秋学期の出席率の低さがそのまま反映されたものと思われるが、その一因としては、履修登録はしたものの、春学期で卒業単位が揃ってしまっただけに出席していない4回生にあるものと考察される。なお学部ごとの回答率は、デイ法40.3%（前回比+10.2%）、デイ文58.4%（同+8.9%）、デイ経46.6%（+10.1%）、デイ商42.1%（+8.0%）、デイ社46.8%（+8.0%）、工49.2%（+8.5%）、総情39.0%（-1.1%）、フレックス・コース（第2部含）47.1%（+6.4%）、保健体育74.6%（+8.0%）であった。



図1:授業評価アンケート実施率・回収率の変化



## 2. 全体的傾向

全学の3,326のクラスについて、延べ263,232人を対象とする「学生による授業評価」アンケートの結果がえられた。共通質問項目は12項目で、「⑤強く思う、④そう思う、③どちらとも言えない、②そう思わない、①全くそう思わない」の5件法で評定する。データの集約は、次のような手続きで行った。まず質問項目ごとにその項目に属する全クラスの個々の評定平均値を、0.5の値の間隔でグループ化し、8つの評価段階に分類する。そして、その8つの評価段階に対して、A+ (5.0～4.5)、A (4.5～4.0)、B (4.0～3.5)、C (3.5～3.0)、C- (3.0～2.5)、D (2.5～2.0)、E (2.0～1.5)、E- (1.5～1.0) というラベル付けを行った。なお、境界の値は上の評価段階に入れた。

図2は、質問項目ごとに、クラスの評価平均値の分布(割合)を示したものである。質問項目は、評価平均値の大きさに基づき、評価の高い項目が上の方に、評価の低い項目が下の方にくるように並び替えられている。毎回のことながら、「出席(10)」に関する質問の評価平均値が際立って高く、90%を超えるクラスでB以上の評価を得ている。したがってこれらの結果は、出席率の高い学生によるものであるという点を前提に解釈する必要がある。

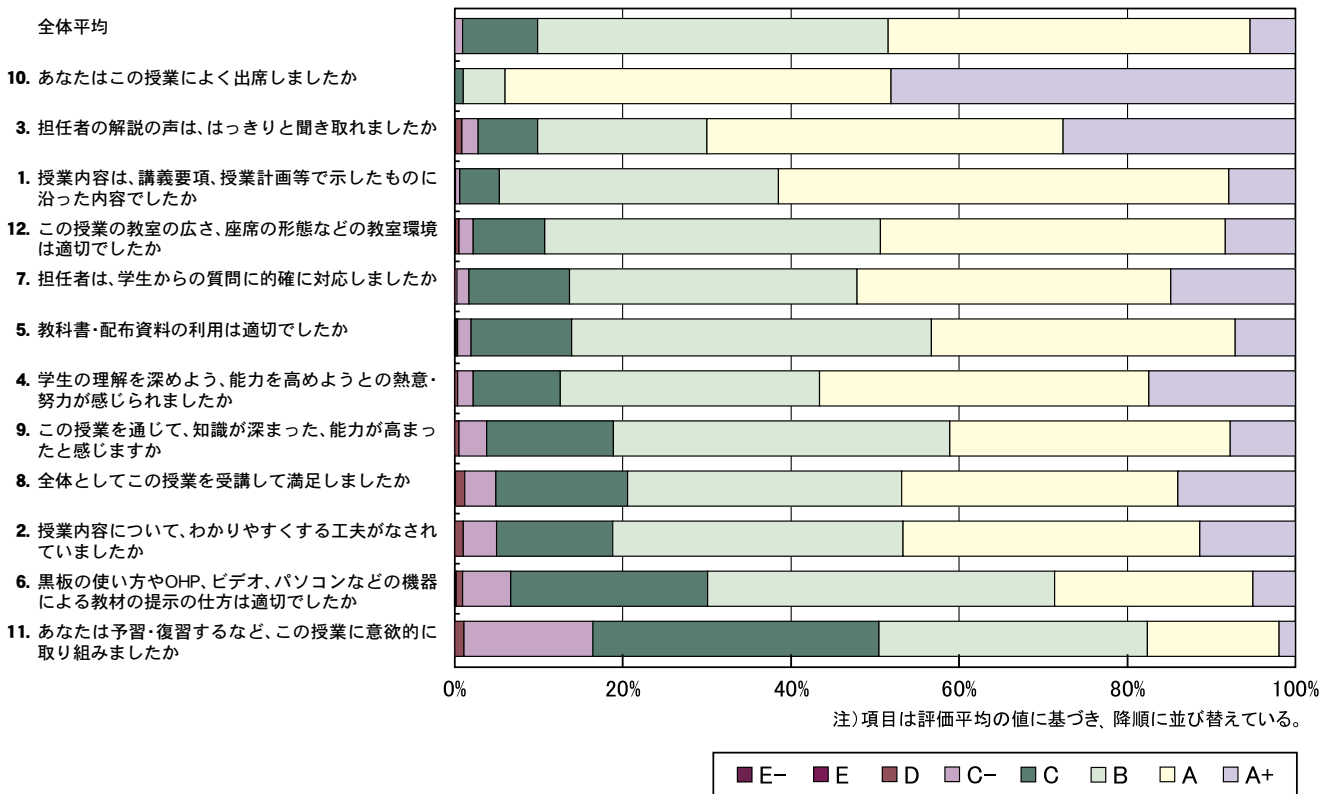
そこで結果の詳細を見ていくと、「声(3)」、「要項(1)」、「教室の広さ(12)」については、評価平均値B以上のクラスが90%前後を占め、C以下のクラスはわずか10%程度である。また評価平均値B以上のクラスが85%前後の項目には、「学生からの質問(7)」、「教科書(5)」、「熱意(4)」などがある。

これらの結果は、教員の授業への取り組みに対する努力が学生にも高く評価されていることを示唆している。しかし、これらの割合は、実のところ2004年の春学期の調査結果とほぼ同程度となっている。つまり授業スキルに関しては、昨年の同時期と比べて、それ程大きな成果はみられていないといえる。

それでは、受講生の学習成果には何らかの変化がみられたのだろうか。例えば、“授業による成果”を測る項目「9.この授業を通じて、知識が深まった、能力が高まったと感じるか」の評定平均値をみたところ、C以下のクラスが約20%となっており、2004年春学期の結果に比べて5%以上減っている。また、“授業態度”に関する「11.あなたは予習・復習するなど、この授業に意欲的に取り組んだか」については、約50%のクラスがC以下になっているが、これも昨年春の結果と比べると、5%近く減少している。これらの結果は、教員の授業スキルに対する評価は昨年と横ばいなのに対して、学習成果や意欲は幾分向上していることを示唆している。つまり徐々にではあるが、担任者の努力が実を結びつつあるといえるのではないだろうか。

教室環境に関する項目(12)については、約90%のクラスがB以上の評価をしており、教室の広さや座席の形態などに関して適切であると回答している。しかし、そうした環境の一部ともいえる黒板やOHP、ビデオ、パソコンなどの機器を用いた教材の提示の仕方に関する評価は厳しく、C以下のクラスが約30%ある。近年の傾向として映像機器等を用いた授業が増えているが、この結果は、機材の使用が必ずしも全てのクラスから高評価を得ているわけではなく、授業の内容や教室環境によっては逆効果につながることを示唆している。例えば“座席位置によってはTVモニターが見えにくい”、“光の入り具合によってはスクリーンがぼやける”といったことが原因となって、授業内ストレスを生じている可能性が考えられる。上述の教室環境に関する回答でごく少数ではあるが(2.17%)、C-以下の評価をつけているクラスがあったが、これはこうした機材運用の不適切さに一因があるのではないかと推察できる。いずれにせよ映像機器等の設備は、教室環境の状況や授業内容、教育効果を総合的に勘案した上で用いる必要があるといえよう。

図2.各項目についてのクラスごとの評価平均の分布



### 3. 担当教員の所属別の状況

表2は、質問1から質問12までの項目に対して、各学部におけるクラス評価平均値と標準値3.0との差を学部ごとに示したものである。

項目(1)～項目(7)までの質問は、授業スキルに関するものである。これらの質問に対しては、全学部を通じて標準値3.0よりかなり良好な評価を得ているといえよう。しかし、2004年度秋学期調査の結果と比較すると全体的に低下傾向がみられ、特に法学部と社会学部では3項目において一段階ずつ評価が下がっている。また項目別にみると、「熱意(4)」においては4学部、「工夫(2)」においては3学部の評価が前回に比べて低下している。

項目(8)と項目(9)は、満足や能力の高まりといった学習成果に関するものである。これらの項目に対する評価は、上述した授業スキルに関するものよりも、相対的に低くなっているのが分かる。また学部別にみると、やはり法学部と社会学部において、両項目とも前回の評価より一段階ずつ下がっている。

項目(10)と項目(11)は出席や学習意欲に関する項目である。出席に関しては、経済学部的一段階上昇もあり、全学部において非常に高い評価が得られている。それに対し、予習・復習といった学習意欲に関

する項目においては2004年秋学期と全く同じ結果であり全体的に評価が低く、特に社会学部の平均値は全学部・全項目を通じて唯一標準値3.0を下回る結果となっている。なお、これは2003年春学期調査から継続してみられる傾向である。

最後の項目(12)は教室環境に関する質問である。文学部と商学部において、前回の評価より一段階低下しているが、それ以外の学部においては大きな変化はみられなかった。

さらに今回の結果全体を学部間で比較してみると、総じて法学部、文学部、外国語機構の評価が高く、工学部と総合情報学部の評価が低くなっている。これもここ数回の調査結果に継続してみられる特徴である。

また、各学部に通ずる問題点としては、「出席はよくするが学習意欲はそれほど高くない」といった点が挙げられる。これは、勤勉ではあるが授業に対する姿勢は受身的といった受講生の心情を表していると考えられる。したがって、今後は授業内での教授方法の工夫に加えて、学生が予習・復習などを通して自主的に学習する姿勢を身につけるような指導を行うことも必要であろう。



表2. 担当教員の所属ごとのクラス評価平均の標準値3.0からのずれ

	法	文	経	商	社	工	情	外	全平均
1.授業内容は、講義要項、授業計画等で示したものに沿った内容だったか	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○	○○	○○○	○○○	3.9
2.授業内容について、わかりやすくする工夫がなされていたか	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	3.7
3.担任者の解説の声は、はっきりと聞き取れたか	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○	○○	○○	○○○	4.0
4.学生の理解を深めよう、能力を高めようとの熱意・努力が感じられたか	○○	○○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○○	3.8
5.教科書・配布資料の利用は適切だったか	○○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○○	3.8
6.黒板やOHP、パソコンなどの機器による教材の提示の仕方は適切だったか	○○	○○	○○	○○	○○	○	○○	○○	3.6
7.担任者は、学生からの質問に的確に対応したか	○○	○○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○○	3.8
8.全体としてこの授業を受講して満足したか	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	3.7
9.この授業を通じて、知識が深まった、能力が高まったと感じるか	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	3.7
10.この授業によく出席したか	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	4.4
11.予習・復習するなど、この授業に意欲的に取り組んだか	○	○	○	○	▼	○	○	○○	3.3
12.この授業の教室の広さ、座席の形態などの教室環境は適切だったか	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○○	3.8
1～12の全体平均	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○○	3.5

ここでの所属は、授業を担当する専任教員の所属と非常勤講師などの推薦母体となった学部・外国語（教養科目・保健体育科目・教職専門教育科目だけの担任者は文学部）である。クラス評価平均値の標準値3.0からのずれを0.4きざみに図表化したもので、○一つにつき一段階上り、▼一つにつき一段階下る。

2004年度秋学期調査（第9回調査）結果より○が減ったことを表している。  
2004年度秋学期調査（第9回調査）結果より○が増えたことを表している。

#### 4. アンケートの改善と課題

前回の第9回調査より、アンケートは次の2点において大きく改善された。まず1点目は、質問項目の統合、削除による大幅な減少である。第8回までの授業評価は21項目と非常に項目数が多かったが、その中には全学的に該当しないもの、内容が重複しているものなどが含まれており、項目の見直しが課題とされていた。そこで幾度となく検討した結果、各学部共通項目を12項目に絞り、その代わりに学部あるいは個々の授業ごとに自由に質問項目（最大5項目まで）が設けられるように改めた。なお、今期の自由設問の活用状況については、工学部のみが学部統一設問を設けており、「宿題・演習」「設備・機器」「TA・SA」などの意義・効果等について検討している。今後は、こうした自由設問欄を有効活用することによって、各学部さらには各授業の特色に応じた調査を実施し、授業目的の到達度を確認していくことが望まれる。

改善の2点目は、アンケート結果のフィードバック時期である。前回より個人結果についてはアンケート実施後2週間程度で、個人結果と全学平均とを併せたものについては、1ヶ月程度で担当教員に返却するようになった。そのため教員は、アンケートの結果をその期間内の授業改善に役立てることや、結果について受講生とともに話し合う機会を設けることが可能となった。これにより受講生も教員とともに授業を作っているのだという自覚を持ち、受身になりがちな授業に対する姿勢を自主的・積極的なものに変えることが期待できる。なお、今後、より一層フィードバックの迅速化をはかるためには、携帯電話によるリアルタイム調査やwebによる調査システムの開発など、調査方法自体の改善も視野に入れ

て検討することが重要かもしれない。

さらに今期から実験・実習科目においても、希望クラスには調査を実施している。これらの科目は講義科目と性質が異なるために全体集計からは省いているが、基本的に実習科目は学生と双方向で授業を展開していくため、講義科目よりもむしろアンケートをやる意義が大きいといえるかもしれない。しかし現在のところ、質問項目は講義科目のものをそのまま用いているので、実習科目には適さない項目や足りない項目もあろう。実習担当者が自由設問をどのように活用しているのかを参考に、実験・実習科目用の質問項目を精緻化していく必要があると思われる。

また調査に協力してくれた学生へのフィードバックとして、第7回調査より『「学生による授業評価」アンケートに対する教員のコメント集』を発行している。この中のコメントを見る限り、大半の教員は授業評価アンケートを有意義なものともみなしている。（例えば、「自らの授業を振り返るよい機会となった」、「今後の授業の課題を発見する上で非常に役立った」など。）授業評価は学生側にとっても自らの受講態度や学習意欲について再確認する機会となる点で、非常に意義あるものと思われる。したがって、今後はこうした授業評価が学生と教員の双方にいかなる効果をもたらし、また評価結果がどのように活用・反映されているのかを継続的に検討していく必要があるだろう。

（社会学部助教授 FD部門・授業評価部門委員会委員）

2005年度の春学期に実施された「学生による授業評価」アンケートにおいて、外国語教育研究機構では、外国語科目全体についての回答結果以外に、クラス規模別に回答の集計をおこなえるかたちでデータをいただけるように希望いたしました。そのように区分された回答データを比較することによって、どのような人数が外国語科目の適正規模であるのか、どのような授業形態がより大きな学習効果をもたらすだろうかを知る手がかりにしたいと考えたためです。おかげさまで、「学生による授業評価」アンケートの春学期分について、クロス集計可能なデータをご用意いただきました。

データの取められたCD-ROMは、今回の調査結果に関して、任意の履修者数を設定し、それに該当するクラスの結果だけを取り出すことができるようになっていきます。分析をおこなうにあたって、対象クラスをどのようなサイズに分けるかがポイントになると思われますが、現在、クラス策定をおこなう際の基準に従って考察をおこなうことにしました。

Aグループ：コミュニケーション・クラスの定員となっている30名以下のクラス。Bグループ：30名を超え、クラス増の基準となっている50名以下に収まっているクラス。Cグループ：諸々の事情により、やむを得ず50名を超えてしまっているクラス。以上の3分類です。

一般クラスを設けるにあたって、50名が定員となっているのは英語のクラスで、それ以外の外国語については45名の定員となっています。今回は、クラス数の多い前者を基準としました。

外国語科目についての質問は各学部共通の12項目でしたが、そのうち質問1～7は、クラス規模よりも、個々の担当教員の授業準備や講義内容に関連するところが大きいと思われるため、分析の対象とせず、クラス規模と最も密接に結びついていると思われる質問12を軸に、履修者の授業に対する満足度や意欲を示している質問8～11と組み合わせる結果を検討しました。

まず質問12について、全クラス対象では、⑤27.9%、④43.1%、③20.4%、②5.4%、①2.1%、不明1.1%という結果が出ており、⑤と④を合わせた肯定的な回答が、71.0%となっています。同じ質問にたいして、Aグループ(10,594人)は、⑤36.8%、④41.2%、③15.4%、②4.0%、①1.5%、不明1.0%と、肯定的な回答が78.0%に増える一方、①と②の否定的な回答は、7.5%から5.5%に大きく減ります。Bグループ(25,552人)の結果は、⑤25.6%、④44.2%、③21.6%、②5.4%、①2.1%、不明1.1%。過半数の学生(全体40,572人中の62.9%)が、このグループに属するせいか、全体の結果とほぼ等しい数値を示しています。他方、Cグループ(4,426人)は、⑤20.3%、④41.5%、③24.8%、②8.7%、①4.0%、不明0.8%という結果です。61.8%と肯定的な回答がなお半数以上を占めますが、否定的な回答も12.7%と一割を超える点が注目され

ます。回答者の多くが、大人数と少人数の外国語科目のクラスを比較する機会をおそらくは持たないなかで、教室の広さなどの学習環境についての回答が、A・BグループとCグループとのあいだで肯定否定ともに5%前後の差が出ている点は注目すべき現象だといえるでしょう。

次に、紙幅の都合からすべての結果について触れることはできませんが、質問12と質問8～11とのクロス集計について見てまいります。

Aグループで質問12が⑤の回答者の質問8の結果は、⑤2,504人、④1,033人、③300人、②98人、①23人、不明42人です。これに対して、Cグループの結果は、⑤396人、④244人、③89人、②45人、①17人、不明10人ですが、⑤と④という肯定的な回答が、14.3%。同じように教室環境が適切であると考えた回答者を対象にしているにもかかわらず、Aグループの22.9%に比べて、授業の満足度という点において無視できない差が出たと考えられます。ちなみに、Bグループについては、⑤と④の合計が18.6%と、両者のあいだの数値になっています。

授業から得た知識についての質問9との関連でも、Aグループは、質問12への肯定的回答者のうち、⑤2,069人、④668人、そして、Cグループでは、⑤345人、④173人という結果になっています。⑤と④の合計が示す割合は、全回答者の25.8%と11.7%です。50名を超えるクラスでは、学習効果の実感が伴わない様子です。

質問10に関して、教室環境を適切だとした回答者のうち、⑤と④の肯定的な回答をした者が、Aグループについて5,397人。Cグループは、1,715人です。それぞれ、50.9%と38.7%に当たります。質問11では、前者509人、後者1,979人で、グループ全体の11.5%と18.6%。いずれも教室環境を肯定的に捉えているにもかかわらず出席や予習・復習について顕著な違いが現れています。

比較的少人数で学んでいるAグループについては、たとえば、コミュニケーション・クラスが含まれているなど、もともと強い動機を持つ集団である可能性があり、クラス規模だけが満足度や達成感に結びついているとは、一概にいえないかもしれません。また、A・B・C、いずれのグループも完全に同じ顔ぶれの教員が担当しているわけではありません。厳密には、同一内容の講義を、同一の教員が、同一の学生を対象におこない、成績評価の基準を統一して効果を測る必要があるかもしれません。しかしながら、今回の結果も、外国語科目において、少人数による授業がよい効果をもたらすという見方を支持している、と違って差し支えないでしょう。

(外国語教育研究機構助教授 FD部門・授業評価部門委員会委員)

## 法科大学院における 授業評価アンケートについて

川口 美貴

2005年度の春学期に実施された「学生による授業評価」アンケートにおいて、法科大学院では、全学共通の質問項目①～⑫の他に、⑬「講義・演習の設備・聴きや授業時間外での施設・設備に満足していますか」、⑭「オフィス・アワーは授業の理解や勉学に役立ちましたか」、⑮「TAの補助は講義・演習の理解や課題の作成に役立ちましたか」、⑯「あなたは受講中、積極的な発言・質問を心がけ、また他の学生の議論が理解できたと思いますか」、⑰「課題の内容・回数は、授業内容を理解する上で効果的でしたか」、という質問項目を設定した。以下、これらの17の設問について、法科大学院の各授業・各教員に対する評価の平均値を対象として、その内容を検討したい。

第一に、授業内容・方法に関する設問①～⑦・⑰については、設問①が4.1、設問②が4.0、設問③が4.3、設問④が4.2、設問⑤が4.0、設問⑥が3.8、設問⑦が4.1、設問⑰が3.6であった。

法科大学院では、教員の教育内容・方法に対する院生の要求水準は非常に高く、教員に対する評価も厳しいものがあるが、その中で、講義要領・授業計画等に沿った計画的な授業内容（設問①）、授業内容をわかりやすくする工夫（設問②）、解説のわかりやすさ・聞き取りやすさ（設問③）、教員の熱意・努力（設問④）、教科書・資料の利用の適切さ（設問⑤）、院生の質問に対する教員の的確な対応（設問⑦）について、4.0以上の評価であったことについては、院生から教育内容・方法について一定の評価を得ていると解してよいと思われる。各授業毎に見ても、大部分は、4.0以上の評価を得られている。

黒板の使い方やOHPなどの機器による教材の提示の仕方（設問⑥）については、各授業の内容、教室、教員によりかなり異なると思われるが、比較的設備の整った教室においては、さらに工夫の余地がある。

課題の内容・回数については、当初、課題が多すぎて睡眠時間も満足にとれないという声もあったので、科目全体の院生の学習負担等を配慮しながら、科目間等で各教員が調整を行うよう努力しているが、今回のアンケートでは全ての科目・クラスの回答は3.0から4.5の間であり、「過重負担」の不満はかなり解消されたと思われる。この問題は、カリキュラム編成の問題と密接に関わるものであると考えられ、院生の学習負担に配慮した効果的な教育方法という観点からも、法科大学院のカリキュラム変更が可能となる設置後3年間を経過する再来年以降に向けての検討課題としたい。

第二に、院生の満足・能力の向上等、学習成果に関する設問⑧・⑨については、設問⑧が4.0、設問⑨が4.0であった。

法科大学院は、法科大学院での単位取得・卒業のみならず、最終的に新司法試験における合格を目的としてい

るため、院生が自分自身で設定している能力・学習成果の到達目標もかなり高いと思われるが、その中で、授業全体に対する満足度（設問⑧）についても、授業を通じての知識・能力の高まり（設問⑨）についても、4.0の評価であったことについては、院生から学習成果について一定の評価を得ていると解してよいと思われる。各授業毎に見ても、大部分は、3.5以上の評価を得られている。

第三に、院生の出席や学習意欲に関する設問⑩・⑪・⑯については、設問⑩が4.7、設問⑪が3.9、設問⑯が3.4であった。

法科大学院においては、病気等の特別な場合を除き、授業に出席することは大前提であるから、授業によく出席したかどうかという設問⑩に対する回答が4.7であることは当然であろう。

これに対し、予習・復習など授業への意欲的取り組み（設問⑪）については、全て（と言っていいと思われる）の院生が期日までに課題をきちんと提出している現状を鑑みると、回答が3.9というのは少し低いようにも思われるが、院生の意識とすれば、もう少し時間をかけて調べればよかったという思いもあるのかもしれない。

他方、受講中、積極的な発言・質問を心がけ、また他の学生の議論が理解できたかという設問⑯について、回答が3.4と低かったのは、ソクラテス・メソッド、少人数教育が重視される法科大学院においては、今後の課題の一つと思われる。本来法科大学院における教育は、多くても1クラス20人を上限として行われるべきであり、これを前提とした教育内容であるべきであるが、現実には、教員数や教室の関係で、1クラスの人数がかなり多くなり、各教員の熱意と努力と長時間労働で、何とかこれをカバーしている面も多い。その他の要因もあろうが、院生の積極的な授業への参加を保障するためには、まず前提として1クラスの院生数を少なくすることが重要であり、これを可能とする人員配置や施設の充実が必要と思われる。

その他の設問⑫が3.6、設問⑬が3.4、設問⑭が3.3、設問⑮が2.9であった。

授業の教室は、満席の場合もあるが、これは先ほど述べた1クラスの人数の問題である。その他の施設については、法科大学院の院生は自習室やローライブラリーがあり、かなり恵まれていると思われる。今後院生の希望を聴きながらさらなる充実をめざしたい。

法科大学院では、全ての教員につきオフィス・アワーが設定され、質問に来る院生も多いが、さらに活用されるよう、時間帯の設定等工夫が必要かもしれない。

TAについては、今回のアンケートの中で最も評価が低かったが、具体的な補助方法等、院生の意見をふまえて改善に取り組んでいきたい。

（大学院法務研究科教授 FD部門・授業評価部門委員会委員）



平成17年10月19日（水）15時から17時まで、尚文館マルチメディアAV教室において「TAを活用した授業について」をテーマに、第9回FDフォーラムが開催された。

関西大学では今年度から試験的にTAを活用した授業を導入している。これは、従来からTAの配置されている実験・実習科目以外の授業科目にもTAを配置して、その教育効果を検証することを目的としている。今回のフォーラムでは、今年度ご協力いただいている教員・TAの中から3組6名に事例報告をしていただいた。

最初に孝忠延夫法学部教授とそのTAに、次いで喜多千草総合情報学部助教授とそのTA（高槻キャンパスからの中継）にご報告いただいた。ともに出席者が数百名にのぼる大教室講義（「憲法Ⅰ」「情報社会論」）でのTA利用に関するご報告であった。お二人は出席管理、私語対策、パワーポイント操作、小テスト実施の補助などのためにTAを利用された。最後に、カイト由利子外国語教育研究機構教授に、数十名規模の小教室授業（「英語Ⅱ a.b.」）でのTA利用に関してご報告いただいた。教員が指示した教科書を訳読していく従来型の授業とは異なる、（受講者自身が教材を選択するといった）受講者の自律的学習能力を育む新しいスタイルの授業を運営しようとした場合、教材の貸し出しの管理、選択の支援など、教室管理上の多くの新たな作業が発生する。そのサポート役としてのTAの利用に関するご報告であった。

詳細はパネリストご自身によるレポート（第9回FDフォーラム配布資料『平成17年度 春学期「TAを活用した授業」報告書』に掲載）に委ねたいが、とりわけ私（司会者）の印象に残

ったのは、TA制度は授業の質の向上に大きく寄与するばかりでなく、TAを務めた学生自身の中に教育者としての能力を育んでくれる、という事実である。TAが教員志望の大学院生であるような場合、配布物・提出物の整理、出欠管理、データ入力といった単純作業ではなく、小テストの解説、プレゼンテーションのモデルを務めてもらうなど、TA自身の教育・研究能力の向上に資するような利用法を考えるべきだろう（この点については期せずして教員パネリスト3名の間にコンセンサスが成立していた）。そのためには教員自身の骨折りがむしろ増す可能性すらある。孝忠教授が指摘されたように、「TAの活用は教員の負担軽減とは別の問題」である、との自覚が教員の側に必要だろう。TA、SA、CEASをどのように組み合わせれば活用すれば教育効果が上がるか、といった問題が今後さらに検討されるべきだろう。

（経済学部助教授 FD部門・授業評価部門委員会委員）



掲示板

【第10回FDフォーラム】開催! ■ テーマ:「教育評価を問う」■

日時 ◆平成17年12月7日（水）14:00～16:30 ◆プログラム

場所 ◆千里山キャンパス

尚文館（大学院）1階マルチメディアAV大教室

高槻キャンパス

大学院棟TD106教室（同時中継）

開会の挨拶 柏木 治 全学共通教育推進機構長

第1部 基調講演「GPA制度と厳格な成績評価」

圓月勝博 同志社大学 教育開発センター所長

第2部 事例報告「教育評価について—外部評価・JABEE審査を通じて—」

報告者 工学部教員及び学生

コーディネーター 工学部教員

活動記録

- 2005.6.1 第8回FDフォーラム開催
- 2005.6.10 平成17年度第3回FD部門・授業評価部門委員会
- 2005.6.13 2005年度春学期・前期「学生による授業評価」アンケート実施  
～6.25
- 2005.7.5 平成17年度第4回FD部門・授業評価部門委員会
- 2005.9.29 平成17年度第5回FD部門・授業評価部門委員会

- 2005.10.14 平成17年度第6回FD部門・授業評価部門委員会
- 2005.10.19 第9回FDフォーラム開催
- 2005.11.11 平成17年度第7回FD部門・授業評価部門委員会
- 2005.11.24 2005年度春学期・前期「学生による授業評価」アンケート実施  
～12.7

◆◆◆◆ FD部門・授業評価部門委員会委員 ◆◆◆◆

- 部門委員長 久保田賢一 総合情報学部教授
- 委員 中野 徹也 法学部助教授
- 原田 正俊 文学部助教授
- 中澤 信彦 経済学部助教授
- 長谷川 伸 商学部助教授（～2005.9.30）
- 中邑 光男 商学部教授（2005.10.1～）

- 委員 池内 裕美 社会学部助教授
- 竹下 博之 工学部助教授
- 鼓 宗 外国語教育研究機構助教授
- 川口 美貴 法務研究科教授
- 稲田 一豊 全学共通教育推進機構事務長